

入選

小さくて、大きな言葉

青森県 古川中学校 2年 村田 玄季

僕はある日、自分よりも小さな子どもに負けました。それは心のやさしさです。その子どもはその日、僕に親切心のかけらをわたしていききました。

それは、電車の中で起こったことでした。小学校低学年ぐらいの子どもをつれた、母親らしき女性の2人組が電車内に入るやいなや、子どもがつり革につかっている人をよけながら、自分のいる方へ足を速めてきました。そして、歩みを止めた子どもは、母親の方を振り返り、こう言いました。

「お母さん、あそこの席、僕が座ってもいいかな？」

そう言って指を差したのは、数名の仕事帰りと思われるサラリーマンや高校生の座っている優先席の端の席でした。たしかに席が空いてはいるものの、明らかに2人分は空いていませんでした。その子どもに対して、母親はこう言いました。

「あそこは優先席って言って、元気な人は座っちゃだめなんだよー。私といっしょに立ってようね。」

と言い、自分やまわりの人は母親の意見に賛成だと言うかのような顔を浮かべていました。しかし子どもは、

「いやだ。僕、もうつかれて元気じゃないもん。」

と言い、それを聞いていた人たちは、少しイライラとした表情を浮かべていました。そして、次の駅についたときに、10人ぐらいの高校生とひとりのおじいさんが入ってきました。その10人ぐらいの高校生が入って来るやいなや、子どもはなんと、優先席に座ってしまったのです。しかし、母親が注意しようと振り向いたときにはもう、子どもは席をおじいさんにゆずっていました。

「なんでこんなことしたの？」

と母親に聞かれると、

「だって僕がゆずらないと、誰もゆずらないもん。」

と子どもは答えました。その言葉が聞こえた瞬間に、僕は恥ずかしさが込み上げてきました。その日から僕は、だめだった今までの自分を変えられるように少しずつ親切を重ねています。